図158　旧味方排水機場

図157　遺跡の位置
５万分１地形図「新津」

味方排水機場遺跡　南区味方

味方排水機場遺跡は、中ノ口川左岸の自然堤防上にあり、地表面の標高は約二・二メートルである。

昭和三十九（一九六四）年秋から四十年春にかけて、味方地区圃場整備事業に伴う排水機場（旧味方排水機場）の建設工事が行われた。この時、工事に従事していた作業員が、地下約一九メートルほどの地点から、縄文土器らしい破片数点を採集した。当時はかなりの話題となったが、いつの間にか忘れ去られてしまった。

平成八（一九九六）年、『味方村誌』の編さん事業が始まると、かつて地下深くから発見された縄文土器のことが再び注目され、土器片の詳細な調査と、現地のボーリング調査が実施された。

土器片は四点現存していた。いずれも厚さが八～八・五ミリメートルで、土器の表面を整える方法や、施された縄文の模様が似ていることから、同じ土器の破片と考えられた。四点のう

ち三点は接合できた。その結果、この土器片は深鉢形の縄文土器の胴体の部分であり、表面にススス状の炭化物が薄くこびりついていることから、煮炊きに使われたものと考えられた。また、新潟県埋蔵文化財調査事業団による、土器の粘土の詳細な分析の結果、縄文時代中期後葉～後期前葉（約四〇〇〇年前）の土器であることが分かった。

新潟大学積雪地域災害研究センターによる、現地のボーリング調査では、土器片が発見された所とほぼ同じ深さの所で、かつてそこが地表面であったことを示す地層が確認された。これらのことから、旧味方排水機場の地下約一九メートルの地点に、縄文時代中期後葉から後期前葉の遺跡があることが明らかとなった。

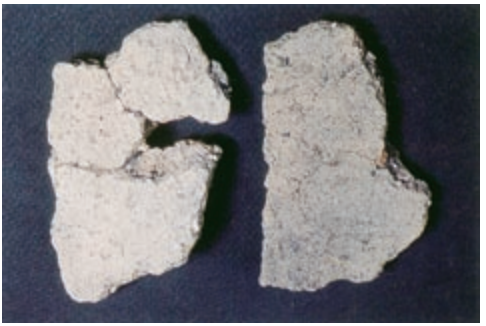

図159　採集された縄文土器片

地下約一九メートルで約四〇〇〇年前の遺跡が確認されたということは、この四〇〇〇年の間に地表面が約一九メートルも沈んだということである。単純計算では、一〇〇年で約四七・五センチメートルの沈下速度である。味方排水機場遺跡は、越後平野のこの周辺が、早い速度で沈み続けているという事実を明らかにした貴重な例であり、今後、越後平野における遺跡のあり方を考える上で重要な遺跡である。